『総合政策論叢』第11号（2006年３月）
島根県立大学　総合政策学会

国際学術シンポジウム「中日韓協力と地域秩序」に参加して

貴　志　　俊　彦

江　口　　伸　吾

2005年８月６日、中国社会科学院日本研究所・アジア研交センターの主催によって、国際学術シンポジウム「中日韓協力と地域秩序」が開催された。中国社会科学院日本研究所の孫新副所長の招聘により、島根県立大学からは貴志俊彦、江口伸吾が報告のため参加した。

左から、金熙徳、浅野亮、孫新、梁起豪、孫承各氏

この時期、中国では抗日戦争勝利60周年並びに世界反ファシズム戦争勝利60周年を記念する行事が行なわれており、訪中前は、いささか過敏なほどの準備をしていた。だが、シンポジウム及び交流会では、日本研究所のホスピタリティに触れ、当初の危惧が杞憂に終わったことを、あらためて喜んだ。

さて、中国社会科学院日本研究所会議室で開催された討論は、下記のとおり３つのセッションに分けられ、合計15本の報告が行なわれた。内容は広範に及び、報告時間も15分程度という短い時間ではあったが、討論は率直に行なわれ、今後の日中韓三国の交流と協力の必要性を確認するとともに、東アジアをめぐる地域連携のあり方については協議を続けていく必要があるとことが共通認識となった。

日　程　表

開会式

司会：金熙徳（中国社会科学院日本研究所・研究員）

挨拶：(1)蒋立峰（中国社会科学院日本研究所・所長）

(2)折敷瀬興（一橋大学北京事務所・所長）

(3)吉田進（環日本海経済研究所・理事長・所長）

(4)崔翼晩（仁荷大学・教授）

第１セッション　東北アジア安保情勢と協力の展望

司会：姚文礼（中国社会科学院日本研究所・研究員）

梁起豪（聖公会大学校日語日本学科・教授）

(1)林暁光（中共中央党校国際戦略センター・研究員）

「東北アジアの国際構図と安保構造に関する思考」

(2)貴志俊彦（島根県立大学大学院北東アジア研究科・助教授）

「『東アジア共同体』構想と日本の地位」

(3)田培良（中国人民学校学会亜非拉部・主任）

「東北アジアの安保情勢およびその趨勢」

(4)浅野亮（同志社大学法学部・教授）

「日本から見た日中関係－日中相互のイメージと自己認識」

(5)梁雲祥（北京大学国際関係学院・副教授）

「東北アジア安保構造と中日関係」

第２セッション　東北アジア経済協力の現状と展望

司会：貴志俊彦（島根県立大学大学院北東アジア研究科・助教授）

徐梅（中国社会科学院日本研究所・副研究員）

(1)吉田進（環日本海経済研究所・理事長・所長）

「中・日・韓・朝経済圏と北東アジアの協力」

(2)張季風（中国社会科学院日本研究所・副研究員）

「中日＜政冷経熱＞の常態化と東アジア経済協力」

(3)崔翼晩（仁荷大学・教授）

「韓中経済協力およびその発展」

(4)姜躍春（中国国際問題研究所・研究員）

「東北アジア経済協力における中日関係」

(5)丁敏（中国社会科学院日本研究所・副研究員）

「東北アジアにおけるエネルギー安全と協力」

第３セッション　東北アジア協力の理論と実践

司会：高洪（中国社会科学院日本研究所　研究員）

吉田進（環日本海経済研究所・理事長・所長）

(1)中川涼司（立命館大学国際関係学部・教授）

「日本における東北アジア論の発展とその系譜」

(2)査道炯（中国人民大学国際関係学院・教授）

「中日関係と東アジア協力」

(3)梁起豪（聖公会大学校日語日本学科・教授）

「東北アジア共同体構造と韓国の立場」

(4)江口伸吾（島根県立大学総合政策学部・研究助手）

「グローバリゼーションと日中関係の展望―北東アジア地域秩序の形成に向けて―」

(5)邵建国（北京外国語大学・教授）
「中日韓市民フォーラムで地域安保コンセンサスを作ろう」

閉会式
司会：張進山（中国社会科学院日本研究所・副所長）
挨拶：孫承（政法大学政治と公共管理学院・教授）
梁起豪（聖公会大学校日語日本学科・教授）
浅野亮（同志社大学法学部・教授）
総括：孫新（中国社会科学院日本研究所・副所長）

当日は、中国社会科学院日本研究所の所員がほぼ全員参加し、小さな会議室は熱気にあふれていた。何より驚いたことは、日本研究所の同時通訳の水準の高さである。半日の間、ほぼ２名で、しかも詰まることもない同時通訳を目の当たりにしたことは、まさに驚異だった。また、日本研究所の所員のみなさんも流暢な日本語を話され、韓国からの参加者も中国語もしくは日本語に達者で、これまで中国の国際学会で戸惑った言語上の問題がなかったために、日中韓ともに率直な意見交換ができたのではないかと思う。

シンポジウムを間にはさんだ２度の交流会も楽しいものだった。また、折敷瀬興先生に連れられて北京の一等地にある一橋大学北京事務所を参観できたのも貴重な経験だったし、夕暮れ時、北京市民が憩う什刹海で北京外国語大学の邵建国先生、貴志、江口で語り合った楽しいひと時は忘れることはなかろう。日中韓の歴史認識のギャップを埋める作業は、こうした率直に議論をできる場を増やす努力が必要なことも忘れてはなるまい。

追記：中国社会科学院日本研究所の呉懐中氏が、本シンポジウムの概要について紹介している。http://www.cass.net.cn/chinese/s30_rbs/files/xsdt/zrhhz.htm